

「最後の優しい言葉だけ」

2006.9.24 永眠者記念礼拝

マルコによる福音書14:32~42 hymn 23, 312, ㊦385

「1995年5月30日、^{かの}河野医院において診察をしてもらい、点滴を受ける。翌31日も点滴」
11年前に召天した私の父、滝口勝の、亡くなった後で見つかった日記の書き出しの言葉
です。

父が63歳の時で、母は56歳、私が33歳、弟の豊26歳、妹の真慰が21歳でした。

「6月5日。河野先生より電話があり、妻が受け、僕は休んでいた。妻は豊に電話し、
彼は急いで我が家に帰ってくれる。僕が運転して河野医院に行かない方がいいという事で。
妻が宣に電話し、宣が河野先生に電話し、事柄を明確に本人に伝えた方がよいとの意見を
述べたようだ。

先ず点滴を 202号室で受ける。途中河野先生が病室に入って来られ、説明を受ける。河
野先生自身がずいぶん悩まれ、一昨日は部屋の中を行ったり来たりされたとの事。妻、豊、
僕、3人で河野先生の話聞く。

- 1) 詳細な説明があり、病気は膵臓癌だという宣告を受ける。
- 2) 残されたこの世における時間は3か月～半年と推定される。
- 3) 手術はできない。
- 4) 抗癌剤を打つ方法はあるが、協議の上自然体でいく事にする。
- 5) 腰痛のため、同日針の治療を受ける。

今まで63年に亘るこの世の生涯であるが、しかし僕は全く冷静に聞く事ができた。この
世に生を与えてくれたのは神であり、又この世から取り去られるのも神である。神のなさ
る事にすべてを委ねる事の出来る僕は、幸福だと思う。

人間は一体どのようにその死を迎える事が出来るのだろうか。かつて教団議長であった鈴
木正久牧師が最後の言葉として『神のなさる事はその時にかなって美しい』という言葉
を残されたが、私はこの言葉を何度か教会で語ってきた。そして自分は果たしてそういう信
仰、思想性を持って生涯の終焉を迎える事が出来るのだろうかと話してきたものだが、今
はそれを受容する事が出来るような気がしている。

しかし後に残していく妻、子供達のことを心配でたまらない」。

「6月7日。昨日は河野医院で睡眠薬をもらって、昨夜寝る前に飲み、2回目覚めたが
比較的良好に眠れた方だと思う。しかし倦怠感は去らず、この世の生命を神にとられて命の
泉に導いて欲しいと思う。

5時30分に目覚め、新聞を読んだり、テレビを見たりしているうちにウトウトし、床を
出たのが10時だった。妻の作ってくれたみそ汁を美味しくいただき、少し動いた方がいい
と思ったので、前の庭の草取りを昼食をはさんで2時間ほどし、体を動かした。

考えてみれば、牧師夫妻を父母として精神的・信仰的に恵まれた若き日々を過ごしてきた。経済状況が困難な中で、僕の希望を受け入れてくれ同志社に学ぶ事が出来た。僕が牧師としての道を選んだ理由は唯一、父と母の牧師・牧師夫人の生活を極めて尊敬していたからであった。多くの兄弟姉妹を養うために、長男としての僕は当然、家庭を支えるべきであったし、町の家庭裁判所の職員に決まっていたわけであった。39年の伝道牧会の歩みをしてきたが、とても父親には及ばなかった。この間神のみ旨に従わない多くの事があったと思うし、牧師としては落第点をつけられても仕方ないと思っています。ただ神の恵みと憐みによって、きょうまで恵みの時を生かされてきたように思う。

父親は95歳、母親は91歳。なお元気で生きて行って欲しい。弟を肺ガンのために失い、僕をやがて膵臓癌のために失おうとしている両親の胸中を察すると心が痛む」。

「6月8日。豊と夜話し合う。彼の言うには、精神的苦痛と肉体的苦痛がある、精神的苦痛は僕が亡くなった後のことを色々苦慮しての事であろうが、責任を負うから後のことは心配ない。経済的な事も心配しなくてよい。僕が無理のないようにしたい事を自由にすればよいとの助言を与えてくれる。精神的にはずいぶん軽くなった。

妻とは初任地倉敷で知り合い結婚した。妻の母は不安で、当初この結婚には反対であった。加えて上下の父より結婚の条件として、将来保育者として働くために聖和女子大学入学・卒業という事であった。妻にはきっと強い抵抗感があったと思えるが受けてくれた。

長男「宣」は上下で生まれたが、寒い雪の降り残った日、妊娠中の妻が買い物から帰る途中、すべて尻餅をついてずいぶん心配したこともあった。

かなり妻と争いもしたが、いつも最終の汽車が出てからの事にしていた。飛び出されて倉敷に帰られては困るから。

1月末に与えられた「宣」を抱いて、鳥取県倉吉教会に赴任した。妻は主任保母として働き、聖日礼拝はオルガニスト。ある日の礼拝中、「宣」が園庭で遊んでいて、滑り台の上から地面に頭から落ちる事があり、結果的には無事であったが、悲痛な思いをさせられた。「宣」は消防車が好きで、自転車で消防署への川沿いの道を走るのが日課であった。

「宣」宣教の「宣」である。両親の神に対する願いが実現して、今は日本キリスト教団の牧師として良き働きをしている。

「豊」の話によれば、子どものころ僕と将棋をし、キャッチボール、ピンポン、釣り等で僕によくつき合ってもらったとのこと。将棋は小学校時代からしているとの事。それではやってみよう。彼は長い間やっていないのだから、どうせたいした事はないだろうと思いつつ、深夜1時まで6番打った。結果は僕の2勝4敗であった。少々頭にきたが、夜も遅かったので比較的ぐっすり眠れた。

「豊」は電話で「宣」に帰ってきて欲しいと言ったとのこと。僕は妻と「豊」に、僕はまだ元気だし、もっと弱ってからの方がいいのではないかと、彼も仕事がある事だしと提案してみたが、「豊」の、この際だから家族がよく話し合い、一致して生きる事の方が大事だとの意見でそれもそうだなと思った。子供に教えられる事が極めて大きい」。

「6月15日。宣も大きく成長した。伝道者・牧会者として、これから様々な苦難があるが、君ならきっと神の助けを借りて、それらを克服して使命に生きていかれると思う。若き日に人生の歩みについて試行錯誤した事は、君の人生にとってプラスに作用しているように思う。僕は親として殆ど何もしてやれなかった。

僕は長男だったが、長男として両親には親不孝をずいぶんしてきた。しかし父親と同じ働きの故に親もきっと許してくれていると思う。

最後になるかどうかかわからないが、18日から真慰と妻と僕と上下に帰ってくる予定にしている。勿論病名は明らかにしないで、力仕事もしないで、ブラブラと過ごしてくる。弟を先に亡くし、次に僕とは、両親もたえられないだろう。

宣に出来る事は、時々母親に顔を見せること、電話で安否を問う事だろう。人間1人で生きていくことは出来ないから、母に対するやさしい思いは忘れないようにして欲しい。

「宣」から聞いたと、今朝10時頃、親友の早川から電話があった。涙が流れて仕方なかった。わが人生一番の親友だ。僕が亡くなった時、葬儀の司式を頼むと言うと、早川におこられた。近日中に来訪してくれるとの事。ガンを告知されて以来初めて、何故に涙を流したのだろうか。親友は有り難い。4月に旅行した時、2晩飲みながら語った日があつかしい。しかし、生きる時間のみを考えて生きていこう」。

「6月16日。宣が帰って来てくれた。昨夜は一家5人、僕と妻、宣、豊、真慰。彼等の子どもの時代から、かなり話がはずんで、ずいぶん楽しかった。

きょうは宣が河野医院に連れて行ってくれた。202号室で点滴を受けながら宣と話した。宣との再会は本当に嬉しかった。彼に言った事は、僕は長男だが両親に対して親孝行は何一つしていない。しかし両親は僕が牧師として働いている事が一番嬉しいのではないだろうか。僕も宣に対しては同じ気持ちだから、僕の話はあまり考えないで、今与えられた牧師としての働きに精一杯生きてほしいという事を言っておいた。

遠くから来てくれて精神的に満足だった」。

「6月18日。上下に帰ってからはじめて、きょうが父の日であることを聞いて知った。父の日だからと、真慰が手紙をくれた。

『1995年6月18日、父の日。いつもどうもありがとう。マナは世の娘たちの中でも1・2を争うぐらい、よい娘に育ったのではないかとゆう自信が自分なのですが、どうでしょうか？ おとうさんはマナみたいな娘がいてきっと幸せ者でしょう。』

阪神大震災やいろいろなことが次々と、滝口家には起こりましたが、これから楽しい予定が沢山あるので、みんなで楽しくやってみましょうね』」。

「6月30日。真慰の運転で妻と共に河野医院に行く。点滴後、河野先生に、葬儀についての僕の今の思いを語った。教会をどこにするか、司式者・式辞・祈祷を誰に頼むか、弔辞は誰にお願いしたいか。河野先生は、自らのこの世の生の終りについて聞くという事ははじめてであると言っていた。

豊との将棋は昨日は2勝1敗、今夜は1勝2敗で、これまでのところ9勝9敗になった。楽しい」。

「7月2日。熊本草葉町教会創立110周年記念礼拝で、説教と聖餐式を担当する。礼拝後、成田牧師が観光案内をしてくれる。少し疲れたのでホテルで仮眠。眠っている間、妻が買い物に出る。書き置きがあった。『よく眠っているので、だまって買い物に行ってきます。きょうは本当に御苦労様でした。説教者・滝口勝はすばらしいです。しんどそうだったけど、御言葉を語っているうちに力が与えられ、聖霊が宿るといのはこういう事をいうのだろうかと思いました。静かに、力強く語る貴方を見る事ができました。ありがとう』。非常にうれしかった」。

「7月16日。神戸新泉伝道所の礼拝説教に行く。河野先生が礼拝後の報告の中で、心情あふれる言葉で僕の病状について説明をしてくれる。しかし、きょうの説教が最後かもしれないという言葉に、少し心みだれる」。

「7月17日。下呂温泉へ真慰の運転で向かう。これから心身共に休養に入り、楽しみが一杯」。

7月18日。蓼科の山小屋で一緒にいる父親に宛てた、真慰からの手紙。

「よく眠れましたか？ このあいだの日曜日は神戸新泉伝道所の礼拝で、久々におとうさんの祝祷（『仰ぎ乞い願わくは…』ってやつ）が聞けて感動しました。うれしかったです。

下呂温泉に行った日は、おとうさんがラーメンとかいっぱい御飯を食べててうれしかったけど、きょうはあんまり食べてなかったので悲しいです。おとうさんが御飯を食べてくれたら、それだけでマナはうれしい気持ちになるので、マナのことを少しでもかわいいと思うなら、無理してでも御飯を食べて下さい。お願いします。これは脅迫です」。

「7月20日。蓼科に着いてから3日目に入る。ここの洗濯機は使用不可能になっており、宣が余分の洗濯機を送ってくれる事になった。28日に家族で来てくれる事になっており、楽しみにしている。未来ちゃんの山での生活も1歳になったばかりで初体験であり、いろいろな出来事を通して成長していく事だろう。1人で歩けるようになったとの事、ジジイとしても嬉しい」。

「7月28日。宣の家族が来てくれる。未来もずいぶん成長し、1人歩き出来るようになって、その育ち行く姿に驚きをおぼえさせられる。よくしゃべるが何を話しているのか今一つわからない。未来は妻と真慰にはそのうちになじんで対応するが、僕はだめ。寄りついてくれない。宣の働きの様子が聞けて、頑張っている姿を思いうかべ、嬉しい」。

毎日記されてきた日記は、8月5日で連続性を失います。書く力がなくなり、2度日付が飛び、最後は19日で終わっています。

8月21日になると全身に黄疸が出て、翌22日には「今週中だろう」という電話が母から私のところに入りました。23日に神戸の家に戻るとすでに父の意識は定まっておらず、私を私であると認識していたか定かではありませんでした。

診察に来た河野先生は、「まだ体にこれだけ力と張りがある。あと1週間は死ねない」と言いました。その言葉を信じて土曜日に自分の教会に戻り、翌日の礼拝説教の準備にかかりました。

その日、8月27日、日曜日の朝8時、父は神さまのもとに召されていきました。床から起き上がり、ベッドの横にひざまずいた姿で。やはり朝起きてすぐに父の部屋をのぞいた母は、父の姿を見て祈っているのだと思い、そっと戸を閉めたそうです。

私はその連絡を電話で受けた直後、自分の教会の礼拝堂に向かい、礼拝説教の中で、教会の人々に父の死を告げました。

たぶん父は、私に教会での働きを滞らせないために、父の言うところの使命を果たさせるために、あと1週間は大丈夫だと思わせ、私をいったん自分の教会に帰し、そして日曜日の朝を待って死んだのではないかと、私はそんなふうに理解しました。

父の日記の最後のページには、学生時代からの親友である早川牧師からのハガキが貼り付けてありました。

「滝口君、祈っている、いつもより一生懸命祈っている。元気を出して下さい。親しい人たちが沢山いて、君は幸せです。私も君の友達である事を誇りにしています」。

牧師が、「いつもより一生懸命祈っている」などと言ってはいけないのです。でも早川先生は、もう牧師などやっていない。人間をやっている。人間の言葉です。「いつもより一生懸命祈っている」。本当に心のこもった、最後のやさしい言葉です。

ラビンドラナート・タゴールという人がいました。彼はインドの思想家であり、宗教家、画家、音楽家でもありました。また東洋人として初めてノーベル文学賞を受賞した詩人・作家でもあります。

彼は年を重ねるに連れ、そしてまた、10年の間に次々と、妻や子どもたち、父親など4人の愛する者の死を経験します。そしてそのことにより、自分の心の貧しさを自覚し、主に向かってあらゆることに耐え忍ぶ力の与えられることを願い、次のような祈りの言葉を残しています。

「わが主よ、これがあなたに献げる私の祈り。

願わくは、私の心の貧しさの根源を、打って打って打ちすえてください。

願わくは、喜びにも悲しみにも、軽々と、耐え忍ぶ力を与えてください。

願わくは、私の愛を、奉仕において、実らせる力を与えてください。

願わくは、貧しい人々を拒むことなく、傲慢な権力の前にも、膝を屈することのない力

を与えてください。

願わくは、私の心を、日常の無益なことどもから、超然と孤高に保つ力を与えてください。

そして願わくは、私の力を、愛を込めて、あなたの御心のままに従う力を与えてください」。

イエス・キリストは十字架につけられる前に、ゲッセマネという所で祈りました。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」。

タゴールもまた、そのキリストの祈りに寄り添いながら、「あなたの御心のままに従う力を与えてください」と祈ったのです。

きょうの聖書箇所で描かれているのは、そのイエスの祈りの言葉と、イエスから「目を覚ましていなさい」と言われているのに、3度も眠ってしまう弟子たちの姿です。

3度目に眠っている弟子の姿を見たイエスは、こう語っています。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい」。これは何を意味する言葉でしょうか。

従来はこう解釈されてきました。眠っている姿が弟子たちのイエスへの無理解を表していると。弟子たちはイエスを理解できずに、まるで眠っているかのように愚かなのだと。そして「もうこれでいい」というのは、イエスから弟子たちへの叱責の言葉、あるいは、あきらめの言葉であると考えられてきました。

しかし私には、そうは思えないのです。私は「もうこれでいい」というイエスの言葉を、受容の言葉、弟子たちをそのままの姿で受け入れる言葉だと思うのです。目を覚ましていなければならない時に、眠ってしまうような弱さを持つ人間を受け入れる言葉。起きていなければならない時に、休んでしまうような愚かさを持つ人間を受け入れようとする言葉。それが「もうこれでいい」ということなのではないかと思っています。

すなわち私たちのように、弱さもあり愚かさもある人間を、そのまま受け入れようとするイエスの言葉なのです。

そしてイエスは眠っているような者に向かって言います。「立て、行こう」。一緒に行こうと言うのです。共に歩もうと言っているのです。

「もうこれでいい」「立て、行こう」。このイエスの言葉が、マルコによる福音書における、弟子に向けてイエスが語った最後の言葉になります。この後イエスは逮捕され、そして十字架による死刑へと向かって行きます。弟子たちはその現実を前にして逃げ出します。弱さと愚かさそのままに、イエスを見捨てて逃げ出してしまうのです。

しかしそのような弟子に向けられた最後の言葉が、「もうこれでいい」「立て、行こう」なのです。弱く愚かなあなたをそのまま受け入れよう、だからずっと一緒に歩いて行こう、それがイエスの、最後のやさしい言葉なのです。

タゴールは、やがて死を迎える自分の姿を、次のような言葉で表現しています。

「いざ、お別れの時が来た、さようなら、兄弟たちよ！ 君たちみんなにおじぎをして、私は旅に出かけよう。

ここに、私の扉の鍵をお返ししよう。こうして私は、家の権利をことごとく放棄する。いまは、君たちの口から、最後のやさしい言葉だけが聞きたい。

私たちは、永い間隣人だったが、私は、自分が与えることができたものより、多くのものを受けとってきた。いま、夜が明けて、部屋の暗い片隅を照らしていた灯は消えた。お召しが来たのだ、そして、私は旅支度をととのえて待っている」。

タゴールが望んでいるのは、「最後のやさしい言葉だけ」です。

私は父に、最後のやさしい言葉をかけることができませんでした。しかし父は私に、最後のやさしい言葉を残してくれました。そしてその最後のやさしい言葉は、それで最後ということではなく、私の中で永遠に続く最後、終わってしまうことのない最後なのです。

最後のやさしい言葉は、私の中で生き続けます。

きょうは永眠者記念礼拝として、先に神のもとに召された方々をおぼえてこの時を過ごしています。お一人お一人の生き方も死に様も異なっており、その生きた長さも歩んだ道のりも違っています。

しかしそれぞれの方々に、最後のやさしい言葉があったのではないかと思うのです。それは与えた言葉かもしれません。与えられた言葉かもしれません。しかし私たちは、その最後のやさしい言葉だけをもって、心の中にその人を思い起こし、その人をよみがえらせることができます。

最後のやさしい言葉だけ、それを私たちの中に生かし、先に召された方々の心を、つなげていきたいと思うのです。

「もうこれでいい」「立て、行こう」。その言葉を私たちは聞きます。私はあなたをそのまま受け入れる、そして一緒に歩いて行こう、寄り添いながら生きて行こう。最後のやさしい言葉は、終りではなく、これからの私たちの人生を支える力となるはずです。